



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

## 鏡映反転

紀元前からの難問を解く

高野陽太郎

鏡に映ると、上下は反対に見えるのに、なぜ左右は反対に見えるのでしょうか？「なぜなのかは、とっくの昔にわかっているのだろう」とたいがいの人が思いこんでいます。ところが、実は、これが大変な難問なのです。プラトンの昔から、二千年以上にわたって議論が続いてきたにもかかわらず、いまだに決着がついていないのです。では、鏡に映ると、左右は、かならず反対に見えるのでしょうか？ 実は、そうではありません。「左右は反対に見えず、上下が反対に見える」という場合もありま

すし、「両方とも反対に見える」場合、「どちらも反対に見えない」場合など、いろいろな場合があります。過去の学説はどれも、こうしたすべての場合を矛盾なく説明することができませんでした。しかし、この本では、形を認知するさいの心理プロセスに、鏡の光学的な性質をうまく組み合わせると、すべての場合がきれいに説明できることを示しました。では、紀元前からのさしもの難問も、遂に解決をみたと言っていいのでしょうか？ この本を手にとって確認してみたいかがでしょう。



著 高野陽太郎  
発行 岩波書店  
四六判 / 256頁  
定価 本体2,700円+税  
発行年月 2015年7月

たかの ようたろう  
東京大学人文社会系研究科教授。専門は認知心理学、社会心理学。著書はほかに『集団主義』という錯覚：日本人論の思い違いとその由来（新曜社）、『認知心理学』（放送大学教育振興会）、『鏡の中のミステリー：左右逆転の謎に挑む』（岩波書店）、『傾いた図形の謎』（東京大学出版会）、『心理学研究法：心を見つめる科学のまなざし』（共編、有斐閣）など。

## ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり

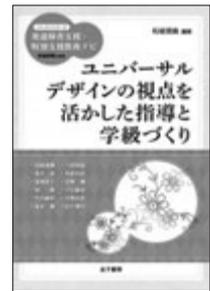
柘植雅義

近年、小中学校の通常学級で、知的障害のない発達障害のある子どもが在籍していることを前提として、彼らも学びやすいように、授業や学級づくりをどのように工夫・改善すればよいかという問いに、教員をはじめ、心理学の臨床家、心理学や教育学の研究者らの関心が高まっている。そのような中、現在この分野で先進的に活躍している研究者や実践者により、その基本的な考えや方法、そして、有効な実践の事例を紹介した。

また、2016年4月の障害者差別解

消法の施行に伴い、障害のある子どもにも必要に応じて「合理的配慮」の提供が求められることになった。授業や学級づくりの工夫は、その文脈で言い換えれば、適切に必要な「変更」や「調整」を行うことに関係すると言っても良いだろう。障害のある子とない子が共に学べる環境の創生に繋がるのである。

なお、本書は、近年、著しい進展が見られた、発達障害のある人への研究・実践のトピックを1冊ずつコンパクトに紹介する『発達障害・特別支援教育ナビ（全10巻）』（金子書房）の第1巻目である。



編著 柘植雅義  
発行 金子書房  
A5判 / 104頁  
定価 本体1,300円+税  
発行年月 2014年9月

つげ まさよし  
筑波大学人間系障害科学域知的・発達・行動障害学分野教授。専門は特別支援教育学。著書はほかに『発達障害のある人の就労支援』（共著、金子書房）、『発達障害の「本当の理解」とは』（これからの発達障害のアセスメント）（いずれも監修、金子書房）、『特別支援教育：多様なニーズへの挑戦』（中公新書）、『特別支援教育の新たな展開』（勁草書房）など。



訳 中谷内一也  
発行 丸善出版  
新書判 / 248頁  
定価 本体 1,000円 + 税  
発行年月 2015年4月

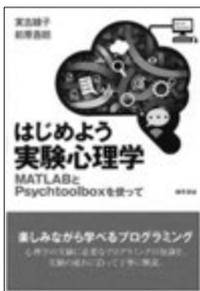
なかやち かずや  
同志社大学心理学部教授。専門は社会心理学、リスク心理学。著書はほかに『リスクの社会心理学』（共著、有斐閣）、『安全。でも、安心できない・・・』（ちくま新書）、『リスクのモノサシ』（NHKブックス）、『信頼学の教室』（講談社現代新書）、『ゼロリスク評価の心理学』『環境リスク心理学』（いずれもナカニシヤ出版）など。

## リスク 不確実性の中での意思決定

中谷内一也

記憶や臨床といった言葉は人の活動を表す日常語として意味が共有されていて、そのまま心理学のテーマとなりやすい。一方、リスクは心理学とのかかわりは深そうだが、どうも、位置づけがはっきりしない。多くの方のリスクに対する印象はこのようなものではないだろうか。このとらえどころのない概念を心理学の中で取り扱うには、ワンクッション必要であり、そのクッションのひとつが意思決定の文脈においてリスクをとらえるという本書の姿勢である。就職や結婚、原発、安保問題等々、私た

ちは個人として、また、社会として意思決定を迫られるが、見通しのはっきりしない要素が多くて難渋する。そのはっきりしなさを特定の見方で定義し、意思決定をサポートするのがリスク分析の役割である。本書は読み物の形をとったリスク分析の入門書であり、また、不確実な世界の中で歩みを進めるための指南書でもある。どの心理学分野においても学びや研究の過程で不確実性に直面するはずである。読者はその問題に対処するための知恵や覚悟、割り切りを味わうことができるだろう。



著 実吉綾子・前原吾朗  
発行 勁草書房  
A5判 / 196頁  
定価 本体 2,600円 + 税  
発行年月 2015年8月

さねよし あやこ  
帝京大学文学部講師。専門は認知心理学、認知神経科学。著書はほかに『フリーソフト「R」ではじめる 豊富な実験と調査例ですらすらわかる心理学統計入門』（技術評論社）など。

まえはら ごろう  
神奈川大学人間科学部准教授。専門は実験心理学、感覚知覚、弱視。著書はほかに『Q&A心理学入門』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。

## はじめよう実験心理学 MATLABとPsychtoolboxを使って

実吉綾子・前原吾朗

コンピュータを使って実験をする時に避けて通れない壁がプログラミングだ。徹夜明けの早朝に、一晩中悩んだ問題が突如解決してプログラムが動き、一人快哉を叫んだのは忘れられない思い出だ。著者らが学生だった頃、わからないことは先輩を捕まえ実験室に押し込めて聞いたものだ。だが最近、教員が忙しい、先輩がいないなど、プログラミングを教えてもらえる環境が少なくなったように感じる。そこで我々は学部生や大学院生が一人でもプログラミングを学べるようにと本書

を企画した。広く普及しているPsychtoolboxによるプログラミングの習得を目的に、インストール、テキストファイルと画像ファイルの作成・保存、刺激提示、反応時間と閾値の測定まで一歩ずつ学ぶ構成になっている。本書で紹介しているプログラムはウェブ上からダウンロードできるので、即座にプログラミング学習をはじめられる。学生だけでなく研究者にも役立つ本になったと自負している。この本があなたに寄り添う優しい(?)先輩の役割を果たすことを願っている。